

日本の若手トップアスリートにおける

両親の教育方針に関する一考察

トップスポーツマネジメントコース

5010A317-2 杉山美沙子

研究指導教員：平田竹男 教授

【I. 序論】

筆者はプロテニスプレーヤー杉山愛のコーチ、ディレクター、そして母として関わった経験を持つ。この3つの役割を兼業することは日本では珍しいかも知れないが、世界にはアメリカのウィリアム姉妹などのトップテニスプレーヤーにもこうした関係を持つ親子は多く、選手とコーチ、また親と子という関係において互いを尊敬し合う非常に良好な関係を築いている。しかし一方で、スイスのマルチナ・ヒンギスなど、親やコーチから練習を強要されて本来のポテンシャルを十分に発揮できなかった選手がいることも事実である。

杉山愛の現役引退後、ジュニア育成現場に戻った筆者は数組の親子から「以前はテニスが大好きだったが、長時間に渡る練習やコーチからの罵倒によって、今ではコートに立つことさえできなくなってしまった。世界で戦ってきた杉山愛もこのような練習をしてきたのか」という相談を受け、世間には杉山愛も幼少期からテニスに集中し過酷なトレーニングを積んできたという危機感を抱いた。しかし実際は、

テニスを始めたきっかけも家族の会話が増えるようにということであり、「テニスは楽しく、すること全てを楽しむ」ことや「自主性を重んじ、強要はしない」ことを教えてきたつもりである。

一方で、筆者の周りにはスポーツ選手に育てたいがために病気以外では休みを取らずに過剰な練習時間を強いたり、練習場に来て成績が芳しくない子どもを殴ったりする親もあり、現在スポーツ選手育成現場における選手とコーチ、選手と親の関係性について違和感を覚えている。

若年アスリートへの過度なトレーニングを危惧する先行研究は海外でも多く、Toflerら(1996)は幼児期におけるオーバートレーニングは選手の免疫力の低下やうつ病を引き起こす可能性があるとして述べ、またBrenner(2007)は幼児期や青年期に選手を過剰にプレーさせることは、彼らのケガを引き起こす大きな要因であるとし、勝利にかける親のプレッシャーが子どものオーバートレーニングを引き起こす一つの重要な要素であると指摘している。

そこで本稿の目的は、トップアスリ

ートになるためには、親やコーチによる若年スポーツ選手への過剰なスポーツ教育が必要であるという認識に対する一考察を試みることである。

【Ⅱ．研究手法】

本稿では、上記の研究目的を達成すべく、2つの分析を行う。

1. 現ジュニア選手からの相談事例

筆者が育成現場で実際に相談を受けた2名の事例研究を行った。

2. トップアスリートの親へのインタビュー調査及びアンケート調査

現在国内外で活躍している宮里藍、錦織圭、石川遼の三名の親に対し、その子どもたちの教育環境に関して調査を行った。

【Ⅲ．研究結果と考察】

インタビュー調査及びアンケート調査の結果、外遊びを多くしていたこと、専門競技以外にも多種の競技を行っていたこと、専門競技に専念した後も練習時間は一日3時間程度であったこと、全ての親が子どものために大変サポートしていたこと、そしてスポーツ以外の稽古事も最初は親の判断で始めたが「稽古事をやらせて良かった」と感じていることなど、13の共通項目が抽出された。

その中でも、トップアスリートは親・兄弟・姉妹・友達など周りの人達からの影響を多大に受けており、こうした生活環境がその後の人格形成に

も役立ち、また、競技のパフォーマンスに何らかの影響を与えていたのではないかという示唆を得た。決断しなくてはいけない状況を自分で判断し、行動することも後のアスリート達がグローバルに戦う上で重要な要素になるだろう。従って、幼児期の運動実施や習い事は人間の成長にとって重要であると考えられる。

また、いずれも「勝利」という結果を求めてスポーツを始めたわけではなく、全ての親が「家族の団欒」としてそのスポーツ始めたと回答しており、スポーツが子どもと親のコミュニケーションを生み、両者を育てたのではないかという示唆を得た。

以上より「真のスポーツスター」の夢を掴むために、親は子どもに対して、スポーツを通じてのコミュニケーションと思考回路を作る環境を与えていくことが最大の役目であるという示唆を得た。

今後も少子化が進み、周りの環境はますます複雑になっていく状況下で、親と子どもの関係は二分化し、幼児虐待などの問題も多くある一方で、一点集中の過剰教育に苦しむ子どもがいる現実にも目を向けなければいけないだろう。